

乳がんサバイバーにおける 倦怠感と報酬に関する動機づけについて

○平田祐樹¹・尾形明子¹
(¹広島大学大学院教育学研究科)

問題

わが国での乳がん患者の生存率は高く、長期のがん生存者が増える中でがんサバイバーという概念が浸透しつつある。がんの長期生存が可能になった一方、日常生活へ影響を及ぼす倦怠感が、ケアすべき要因として注目されている。がんサバイバー以外の領域でも倦怠感について研究がされており、特に近年様々な研究が、報酬と倦怠感の程度の関連を調査している。遂行した課題に対しての報酬を増やすことで倦怠感が減少すること(Boksem et al., 2008) や、特定の脳部位の損傷が、報酬の有無の評価を正確に行えなくし、倦怠感の知覚の程度を上げる(Chaudhuri & Behan, 2008 ; O'Doherty, 2004) など、倦怠感と報酬との関連が示されている。Pardini et al. (2012) は多発性硬化症患者に対し、倦怠感と BIS (行動抑制系) /BAS (行動賦活系) との関連を検討した。この結果、BAS の下位因子である、BAS RR (報酬反応性) が倦怠感に負の影響を与えていることを示した。このように倦怠感と報酬との関連性が明らかになっているにもかかわらず、がん領域においては未検討である。がん領域において、両者の関連が示された場合、今後の支援において有用な知見となるだろう。よって本研究では、Pardini et al. (2012) の研究を基に、乳がんサバイバーにおける倦怠感と BIS/BAS の関連について検討を行う。

方法

参加者 乳がんサバイバー300名 (女性 300名) を対象に行った。平均年齢は 52.0 歳 (SD=6.16) であった。

質問紙の構成 ①報酬に関する動機づけ 高橋・山形・木島・繁樹・大野・安藤 (2007) が作成した BIS/BAS 尺度日本語版 20 項目を 4 件法で行った。②倦怠感 Okuyama et al. (2000) が開発した Cancer Fatigue Scale (以下、CFS) 15 項目を 5 件法で行った。③抑うつ 北村 (1993) が作成した HAD 尺度を測定に用いた。本研究では、下

位尺度である抑うつ尺度 7 項目を 4 件法で使用した。④フェイス項目 パフォーマンスステータス、睡眠障害の有無、再発・転移の有無、現在の治療形態 (外来・入院)、診断時期、治療終了時期、治療歴を尋ねた。

結果

倦怠感と BIS, BAS RR の関係を階層的重回帰分析で検討した結果、BAS RR は有意に負の影響 ($\beta=-.135$) を与えていた。倦怠感の各下位尺度の平均値をもとに、低群・高群に分け、BAS の下位尺度得点を従属変数として分散分析を行った。その結果、BAS D (駆動) において精神的倦怠感と身体的倦怠感の有意な交互作用が認められた ($F(1, 292)=4.853, p=.028$)。行動賦活系の駆動 (BAS D) 得点は、身体的倦怠感低群において、精神的倦怠感の低群より、高群が有意に低く ($F(1, 292)=15.339, p=.000$)、精神的倦怠感低群において、身体的倦怠感の低群より、高群が有意に低かった ($F(1, 292)=10.033, p=.002$)。

考察

本研究結果より、報酬反応性を高めることが、倦怠感の低減につながる事が明らかとなった。行動賦活系の駆動は、精神的倦怠感の高低ならびに身体的倦怠感の高低により影響を受けることが示唆された。結果は示していないが、報酬反応性と駆動に高い正の相関が認められてる。以上のことから、報酬反応性を高めることで倦怠感が低減され、倦怠感が低減されることで、駆動が高まり、その結果報酬反応性が高まる事が示唆された。病院から離れた乳がんサバイバーの方々は、日常生活上の出来事に関心を持ち、報酬反応性を高めていくことが倦怠感のケアに有効な支援と考えられる。

主な引用文献

Pardini, M., Capello, E., Krueger, F., Mancardi, G., & Uccelli, A. (2012). Reward responsiveness and fatigue in multiple sclerosis. *Multiple Sclerosis Journal*, *19*(2), 233-40.